

助成研究の概要

※ 各助成年度の論文集より助成研究概要を抜粋

【平成 27 年度助成】

地域医療サービスを支える道路交通網への依存性に関する研究

札幌医科大学附属総合情報センター助教 高塚伸太郎
札幌医科大学附属総合情報センター准教授 大西 浩文
札幌医科大学附属総合情報センター研究生 山口 徳蔵

十分な医療サービスの提供を目的として、北海道には 21 の二次医療圏がある。ところが二次医療圏を超えた圏外受診が多く存在する。北海道は広大なため圏外受診には時間的・金銭的なコストが必要となることが予想される。こういった実態を調べるため、北海道の 4 市 3 町からレセプトデータの提供を受け、解析を行った。

レセプトデータから受診者単位の解析を行うために名寄せを行った。名寄せは個人番号を基としたハッシュ値を用いた。これにより、総合行政システムを適用している 4 市 2 町において国民健康保険と後期高齢者保健制度をまたがった名寄せが可能となった。

解析の結果、圏外受診者の割合は 2 つの町で非常に多く、地域格差をうかがわせた。そのうちの一つの町に注目し、詳しく解析したところ、圏外受診に季節性がみられた。圏外受診先の大きな二つの医療圏である十勝圏と札幌圏に注目したところ、近場の十勝圏の方が全体的な医療費の比率は高かったものの、1~2 月期には札幌圏の方が高くなる現象が明らかとなった。このことについて、冬期間は積雪のため道路事情が逆転するという仮説を立て、平均移動時間や通行止め回数などから解析を行ったが、目立った相関は得られなかった。1~2 月期に医療費が逆転する内訳としては、入院が関わっていることは明らかとなったが、具体的な疾病名はばらつきがあり、特定の疾病が原因とは判明しなかった。道路事情が大きな一因と疑われるが関連が得られなかった理由としては、レセプトデータの匿名性が考えられた。このため解析で考慮されたのは主要な道路のみであり、主要な道路交通網は冬季でもそれほど悪化しないため、このような結果となったことが推測される。

また、疾病ごとの解析で緊急性の高い疾病や定期的な治療を必要とする透析患者でも長時間の通院を行っている例があることが明らかとなり、これにも地域格差があることが分かった。道路交通網はコストとベネフィットを考慮して開発されるべきであるが、このような生命にかかわる患者の道路利用による利益は数値に表れにくい要素も考慮することが必要であると考えられる。

【平成 25 年度助成】

北海道の僻地医療を支える救急看護師の職務継続の要因に関する研究

札幌医科大学保健医療学部看護学科助教 中井 夏子

本研究の目的は、北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因について明らかにすることである。

札幌市を除く北海道内に所在する救命救急センターに勤務する看護師を対象に半構成的面接法を用いてインタビューを行った。インタビュー内容から逐語記録を作成し繰り返し精読し全体像を把握した。逐語記録より「救急看護師として職務を継続してきた要因」に焦点を当て分析対象の文脈単位を抽出し、コード化した。導き出されたコードは内容の類似性と共通性に基づき分類しサブカテゴリ化、カテゴリ化した。分析の全過程において共同研究者間で繰り返し検討し、質的研究に精通した研究者よりスーパーバイズを受けた。

なお、本研究は研究者が所属する施設の倫理審査を受け実施した。

対象者は救命救急センターで5年以上勤務経験のある看護師4名であった。対象者の語りから、救急看護に携わり職務を継続してきた要因は【地域医療を担う看護師として責任を感じる】【救急看護の経験を後輩に伝承したい】【救急看護師としての自分に満足できない】【救急看護師としてキャリアビジョンを持っている】【救急看護との縁を感じる】【救急看護という仕事に魅力を感じる】【重症患者の救命や回復の軌跡に喜びを感じる】【救急患者および家族のケアを通してやりがいを感じる】【職場の人間関係の良さ】の9つのカテゴリが抽出された。このことから、都市部を除く地域で働く救急看護師が職務を継続するためには、地域医療を担う責任感が持てるような関わりや自身の仕事に対する課題と目標の明確化および仕事内容へのやりがいや喜びを実感できるような支援体制を構築するとともに、職場環境を整えていくことが必要であることが示唆された。

【平成 27 年度助成】

北海道の地方において救急医療に携わる看護師が抱える困難の現状と課題

ーアクションリサーチによる支援モデル構築の基礎的研究ー

札幌医科大学保健医療学部看護学科教授	城丸 瑞恵
札幌医科大学保健医療学部看護学科助教	牧野 夏子
日本医療大学保健医療学部看護学科教授	門間 正子
札幌医科大学附属病院高度救命救急センター主任看護師	田口 裕紀子
札幌医科大学附属病院集中治療部門主任看護師	春名 純平
北海道立子ども総合医療・療育センター主任看護師	皆川ゆり子
札幌医科大学附属病院手術部主任看護師	内田 裕美
北海道医療大学看護福祉学部看護学科講師	神田 直樹

本研究は、救急看護師が抱える困難に対する支援モデル構築のための第一段階として、道北の救命救急センターに勤務する看護師が考える救急医療の現状と救急看護師が抱える困難につ

いて明らかにすることを目的とした。

道北にある救急医療を担うA総合病院の救命救急センターに勤務する3年以上の看護師(以下、救急看護師)10人を対象とした。平成27年6月～10月にインタビューガイドを用いて、研究参加者へ30分～60分程度の半構造化面接を実施した。得られたデータは逐語録にして、「救急医療に携わる看護師の現状と困難」に関連する部分を抽出して内容の類似性と相違性に注目しながらサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

1)対象者の概要:調査対象者は10人であり看護師臨床経験 19.4 ± 5.4 年、救急看護師経験 5.8 ± 2.9 年であった。

2)地方救急医療に携わる看護師が考える救急医療の現状:対象者のインタビューから、地方救急医療に携わる看護師が考える現状として【広域救急医療がもたらす現状】【全次型救急医療体制がもたらす現状】【地方特性が影響する救急患者の特徴】【遠方から来院する家族対応の現状】【迅速・専門を考慮した患者対応の現状】の5つのカテゴリーが抽出された。

3)地方救急医療に携わる看護師が抱える困難:地方救急医療に携わる看護師が抱える困難のカテゴリーは、【全次型救急医療がもたらす困難】【広域医療体制がもたらす困難】【他病院との連携困難】【患者教育の難しさ】【救急看護に対する難しさ】【スタッフ教育支援に対する困難】【自己研鑽実施の難しさ】の7つが抽出された。

上記の結果から地方の救急看護師が置かれている現状や抱えている困難について明らかになった。今後はこの課題に対する支援方法を調査対象者とともに検討・実施して支援モデルの構築を行う予定である。